

紀伊半島大水害時の住民の避難行動に関するヒアリング調査と伝承活動について

○和歌山県土砂災害啓発センター 稲田健二
防災士（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町在住） 久保榮子

1. はじめに

2011年9月の台風12号に伴う記録的豪雨により、紀伊半島では洪水・土砂災害が多数発生し、とりわけ和歌山県では、死者・行方不明者61名という甚大な被害が発生した。特に被害の大きかった那智勝浦町的那智川流域の井関地区で、ご家族を亡くした久保榮子氏は、自身の被災体験から学んだ教訓を伝承するため、手書きの紙芝居を用いて、紀伊半島大水害での体験と教訓についての講演活動を和歌山県土砂災害啓発センターと連携して継続的に行っている。（写真-1）

久保氏は、自身の体験だけではなく、井関地区の被災者に聞き取りを行い、地区住民がどのような被災体験をしたのかについても絵にして、伝承する活動にも取り組んでおり、これまでに12枚の絵が完成している。今回、それらの被災体験の事例の中から住民の避難行動の事例を一部紹介する。



写真-1 被災体験紙芝居

2. 井関地区の被害概要

井関地区は地区を流れる那智川が土砂・洪水氾濫により閉塞し、越水・氾濫したことで地区全体が広範囲に浸水した。全半壊した家屋は45戸に及び、流木や車、巨石などの漂流物の衝突により家屋が被災した。全家屋が集中する町立井関保育所の上流の狭窄部においては、最大浸水深3.55mを記録しており、当地区での死者・行方不明者10名は全員土砂・洪水氾濫によるものであった。越流氾濫の時間は、被災者の証言により、9月4日深夜2時48分頃とされている¹⁾。

3. 井関地区住民の被災体験と避難行動

3.1 呼びかけによる避難の事例

甥と二人暮らしのA氏は、同じ那智勝浦町内に住む兄から、被災の当日に何度も避難するように訴える電話を受けていたが、避難をしていなかった。3回目の電話で

「まだ（避難）していないか」「うちの方はもう水が来たぞ」と言われて、ようやく自分の家裏的那智川の様子を見に行ったところ、見る間に水位が上がっていく状況を確認し、初めて自分の身に危険が迫っている状況を知った。急いで軽トラックに乗り、避難所の市野々小学校に向かったが、道中の県道は既に冠水している状況であった（写真-2）。水の中を突っ切って避難所に駆け込んだ直後に激流が襲い、間一髪で助かった。身内や知り合いなどからの避難の呼びかけがいかに有効であるかを伝える事例と言える。



写真-2 避難の呼びかけを受けて避難する様子

3.2 垂直避難の事例（その1）

高齢の母と住んでいる息子のB氏は、平屋の自宅に水が流入し、畳が浮かび始めて洪水に気がついた。洪水で道路には出られず、隣の二階建てのC氏宅への避難を試みた。隣家との間には高い石垣があったが、母を石垣の上に押し上げて、二階のひさしの下を慎重に伝い、窓を叩いて助けを求めた（写真-3）。

雨の音は激しく、中々気づかれなかったが、ひさしの端まで行ってやっと住人に気付いてもらい、2階の部屋



写真-3 隣家の2階に助けを求める様子

に避難することができた。その後5分も経たないうちに、地震かと思うほどの轟音がして、石垣もろともB氏の自宅が、跡形もなく流失した。

3.3 垂直避難の事例（その2）

次に外階段による垂直避難の事例である。2台の車が地区の上流にある避難場所の那智勝浦町立市野々小学校を目指して避難していた。しかし県道が冠水し、水嵩が増して立ち往生してしまった。その時避難者は車から降りてこっちへ来いと呼びかける声を聞いた。声の主は県道沿いの建物の外階段にいた消防署の職員であり、車から降りた避難者はその外階段を上り、助かることができた（写真-4）。当時、地区から避難所までの道沿いにある家屋で外階段があるのはこの家屋しかなく、普段からどこの建物に外階段があるのか確認しておくことも大切であると教えてくれる事例である。



写真-4 外階段で垂直避難をする様子

3.4 教訓を活かした避難の事例

K氏の自宅は洪水により流れてきた50kgのガスボンベが外壁に衝突して穴が空き、そこから水が流れ込んだ。六畳の和室が浸水し、水に浮かんできた6枚の畳が重なって、天井裏に通じる入り口を塞いでしまい、避難することが出来なかった（写真-5）。災害時には、ガスボンベや畳などの意外な物が、危険を及ぼしたり避難の障害になったりすることもあると言える。

避難が出来なくなったK氏夫妻は、倒れた冷蔵庫の上に物を置き、やむなくその上に座っていたが水位は高くなるばかりであった。水面に頭だけが出る状態となった時、夫からこれまで世話になったと感謝の言葉をかけられたK氏の妻は「このまま死んでたまるか」と思ったという。その時、小さい頃の伊勢湾台風の際に聞いた「水は出口を設けてやればそこに流れていく」との言葉を咄嗟に思い出した彼女は、玄関を目指して水の中に飛び込んだ。玄関にあった長い柄のついた剪定ばさみでガラス戸を突き破ると、水の出口が出来、次第に家の中の水位が下がっていった（写真-6）。その時の家の外の水位は家の中の水位とは全く違い、外の方の水位がかなり低かったそうである。言わば家の中が密封された状態になっており、壊れた壁穴から洪水の流入が続いていたものと考え

えられる。なお、この時の妻の勇気ある行動によりK氏夫妻は今も元気で暮らされている。

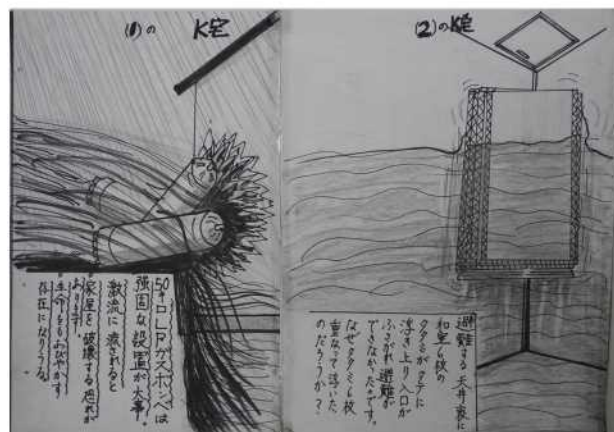


写真-5 ガスボンベが外壁を破壊する様子(左)と畳が避難口を塞ぐ様子(右)

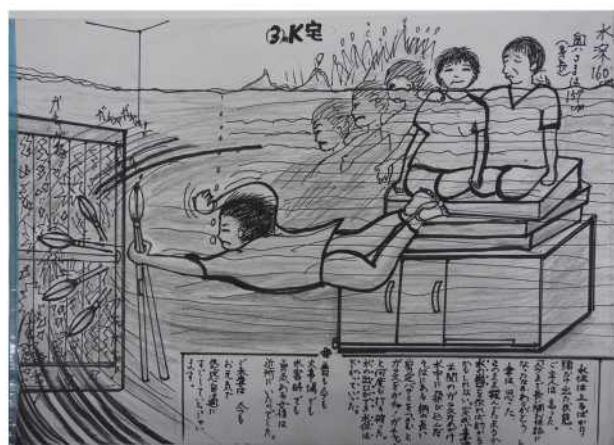


写真-6 玄関戸を壊して水の出口を作る様子

4. おわりに

那智川流域では災害によって命を失われた方以外にも、避難行動により難を逃れ、非常に危険な状況に陥りながらも助かった住民は多い。早めの避難が大原則であることは言うまでも無いが、次善の行動としていざという時に普段からの住民同士の付き合いが助け合いにつながり、被害が軽減している例もみられる。また、幼少時に聞いた教訓を思い出して命が助かる行動を取った住民もいる。

住民へのヒアリングを行って、住民が災害時にどのような行動を取ったのかを、その教訓と共に分かりやすく伝えていくことは、災害を自分事として考えてもらいやすく、住民や地域の防災力向上を図る上で効果的であると考える。

参考文献

- 1) 郡典宏・西川友章・吉川卓郎・渡辺隆吉・笠原拓造・島田徹・久保毅・三好葉子・岩渕三千生：紀伊半島大水害における那智川流域の被害の実態と警戒避難行動，砂防学会誌，Vol.77，No.2，p.12-19，2024